

## 揖斐川町学校教育の在り方審議会・小島地区集会（議事録概要）

1 日 時 令和7年12月9日（火） ＜開会＞19時00分 ＜閉会＞20時00分

2 場 所 小島コミュニティセンター・多目的室

3 出席者

審議会委員 佐木 みどり、森 允

事 務 局 教育長 香田 静夫、事務局長 所 貴宏、学校教育課係長 松浦 亮太

地 域 住 民 62人

### 4 次 第

#### （１）開会挨拶

- ・ 佐木副委員長より、開会の挨拶を行う。

#### （２）概況説明

- ・ 教育長より、「揖斐川町における学校教育の現状と課題」について説明を行う。

#### （３）意見聴取

住 民：揖斐川町の出生数の減少を鑑みると、私個人としては学校を統合すべきではないかと考えているが、そのうえで審議していただきたい内容が4点ある。1点目に、実際に北方町や大垣市の上石津地区でも立ち上げられている「義務教育学校」について、様々なメリットやデメリットがあると思うが、実際に立ち上げられているところから学びつつ、その形式を検討事項の一つとして挙げていただきたい。2点目に、私は統合をよしとする立場だが、今の教育の中で学校社会に溶け込めないような子どもたちが増えているように感じており、そういった子どもたちの受け皿をつくる必要があると考えている。もし統合した場合、空いている学校施設ができる可能性があると思われるため、そういったところに子どもたちを受け入れる受け皿をつくる、ということも非常に特色あるような学校教育ではないか。そこで、そうした「小規模校の活用」についても検討していただきたい。3点目に、もし統合されるのであれば、学校施設を新規で立ち上げていただきたいと思っている。財政が非常に厳しいことはわかっているが、卒業生には卒業した小学校や中学校への思い入れがあるため、もし統合後に既存の施設を使うことになると、住民感情などといったところで摩擦が生まれるのではないかと考える。やはり新しく施設を立ち上げる方が住民感情として角がたたないのではないかと考えているので、「学校施設の新設」について検討していただくようお願いしたい。4点目に、5年ほど前には出生数が100人を切ったことについて議論していたと思うが、それが今では50人を下回っている。今後はもっと減る可能性もあると思われるが、その場合町単体で教育を賄うことは難しいと思われる。そうであるならば、どこまで広域的に考えるかは別として、揖斐郡や西濃地域といった広域での連携についても今のうちから検討すべきである。実際に中学校では部活動の広域連携を始めていることから、学校教育自体もそういったことができるのではないか。そうした「広域教育への転換」についても検討していただけるとありがたい。揖斐川町が教育でまちづくりを進めていけば、住みたいという方々が出てくると思う。転入者がこの地域で学ばせたいと思うような学校を検討していただきたい。

住 民：1点目に、60年ほど前に小島村が旧揖斐川町となったことから、恐らく50～60年程度の感覚で町村合併は進んでいくと思われる。また、今の揖斐川町が生まれてから20年ほど経っており、恐らくあと30年後には町全体がどうなるか、ということが議論されるかと思うが、学校についても今の揖斐川町の人口で考えるのではなく、30年後、50年後、100年後と先を見据えた形で検討していただきたい。2点目に、揖斐川町は給食費の無償化や修学旅行費の補助などの施策に早期に取り組んできたが、それによって揖斐川町に移住してきた保護者の方はほとんどおらず、実際に移住された方は田舎暮らしを求めて来た人ではないかと思っている。また、先ほど説明があった町の教育の特色についても、やっていることは違っても、子どものためを思ってやっているという点は恐らくどの地域でも同じではないか。自然がある、ということはどの地域でも聞くことであり、特有の魅力とは言えない。さらに、池田町や大野町も同じように統合に関して動いていて、恐らく同じような時期に進めることになると思うが、そうすると競争になる。その場合、揖斐川町の子どもは池田町や大野町には引っ越していくが、池田町や大野町から揖斐川町にはなかなか引っ越してくれないので、その2町と足並みを揃えているようではますます少子化が進むだけだと思っている。例えば、揖斐川町の中学校に行けばプログラミングが簡単にできるようになる、小学校に行けば英会話ができるようになる、といった他の地域に負けない、日本一であると言えるような魅力のある学校づくりを目指してほしい。学校が新しく生まれるのであればそれを打ち出す絶好の機会になるため、コミュニティ・スクールの中でもそういったことを踏まえながら進めていただくとよい。3点目に、小学校や中学校の話はあったが、それならば同様に幼稚園に通う子どもたちも減ることになる。幼稚園は幼い子どもたちに関することなので残してほしいと思うが、そうした幼稚園の体制がどうなるのかということも考えていただきたい。最後に、町全体で統合するのであれば、資料の図表2をみると6年後の児童数は小島小学校が最も多いため、一番児童数が多い小島地区に新たな学校を建てるというのはどうか。地理関係など様々な問題はあと思うが、児童数が最も多いところに統合後の学校を建てるということが素直な考え方ではないか、と考えている。

住 民：学校教育の在り方審議会は、初めて揖斐川町に設置されたものか。今回審議会を設置した理由は何か。

教育長：この審議会は今回初めて設置したものであり、「これからの学校教育をどうしていくか」ということについて、第三者の方に集まっていただき議論していただくことを目的とする町長の諮問機関として設置した。議論するにあたって、住民の皆様のご意見をお聴きする必要があると考え、審議会委員が皆様からご意見をいただく機会として地区集会やシンポジウムを行っている。

住 民：出生数が50人を切ったために急いで設置したように感じており、以前から少子化や人口減少が進んでいた中で動き始めるのが遅すぎるくらいではないか、これからどのくらいスピード感をもって進めていただけるのか、と思っている。長期的な目線でみると、揖斐川町は高齢者が多いということもあり、将来的には今の保護者の方や学生といった若い世代の負担がどんどん大きくなると思われる。そういった負担という点について、何十年と先を見据えながら議論していただきたい。また、これまで区会の中で町行政に対して様々な意見を出しても、「前例がない」ということでなかなか意見が反映されてこなかった。何らかの固定観念があるのではないかと思うが、この問題に

についてはすでにかなり緊急の課題だと感じるため、ぜひ前例主義や固定観念を取り払って検討していただきたいと考える。

住 民：例えば小学校１～２年生について、子どもたちの発達状況を理由に30人学級で編制している自治体もあり、県が決定するのか町で決められるのかはわからないが、独自に学級人数の設定をすることもできると思われる。学校は学力を付けるだけの場所ではなく、集団生活の中で人間性の向上や人格形成をすることが目標なので、本当に子どもたちの数が少なくなった時にはそういう点も配慮して学級編制をしていただきたい。また、学校を１つに統合する場合、遠方から通う子どもにどういう配慮をするのか。ただスクールバスを運行すればよい、ということではないようにも感じている。例えば山奥に住んでいる中学生について、雪の時期には学校に通えないために寮のようなものを設定しているという話を聞いたことがある。また、逆に家族全員で学校の近くに居住してもらい、現在の住居に行く必要がある時には保護者の方がそちらへ行く、という方法も可能ではないか。空き家やアパートの空室を斡旋すればできるようにも思えるので、そうした方法も考えていただくとよい。次に、教員について、働き方改革の効果は出ているのか。例えば部活動の地域移行などによって、その分子どもたちの学習指導や生活指導などに充てられる時間が増えることになると思うが、それが本来教員のもつべき専門性だと思っている。子どもたちと向き合う以外の様々なことについて、必要であればそのための人員を確保し、雑務もできる限り排除していくように進めていただきたい。最後に、資料５ページの「多様な学びの場の保障」には様々と書かれているが、大人が決めた仕組みのように感じる。校則の見直しを子どもたちが主導して進めているという話をよく聞くが、やはり子どもたちの意見をもっと反映した様々な取組みが必要であり、そういった学校づくりを目指していただきたい。

住 民：今私が住んでいる地域には小学校６年生が１人いるが、その子が卒業すると小学校１年生が２人だけとなる。また、近くの地区にも子どもはおらず、少し離れた地区に１人いるだけなので、分団を組むことができなくなっている。以前は地域のサポーターの方などもいたが、少子高齢化によって務めていただける方もおらず、今は保護者の方がついていっている。ただ、今後しばらく子どもが増える様子はないため、２人の保護者が６年間送迎を続けなければいけないという問題が起きている。そこで、春日小学校が小島小学校に統合されたことによりスクールバスが近くを通ってはいるので、区長からそのバスを利用できないか提案していただいたが、「前例がない」ということで実現していただけなかった。すでに前例がない事態になっているため、そういったことについて今後話し合っていただきたい。また、住んでいる地区とは別の地区に住んでいる、ある子どもの家の隣に外国人が移住されたそうで、分団でもうまくコミュニケーションを取りながら一緒に登下校しているとのことだった。こうした海外からの移住者は今後も増えるのではないかなと思うが、その時にそうした海外の子を受け入れられる地域であることが大切である。そういった子どもたちの学びやそのご家族へのフォローが現状どの程度できていて、これからどの程度進めていくのかが気になっている。

住 民：少子化が進む中で、いずれは統合をしなければならないということは恐らく皆様想像するところだと思うが、あえて子どもが少ないことによるよい点について考える。私は70歳を超えているが、小学生の頃に地域の中であったことは今でもよく覚えていて、こういったことが「ふるさと」という感覚に結び付くのだと感じる。よく「子どもは

宝」という言葉が使われるが、誰にとっての宝なのか考えると、その中には「地域」が含まれるとともに、「宝」には地域の未来を担ってくれる存在という意味があると思っている。恐らく幼い頃に体験した地域の記憶があることによって、都会に出ていったとしてもいずれ戻ってきて、担い手になってくれるということがあるのではないかと。そう考えると、この「地域」というものに対して小島小学校は重要な位置を占めており、同じ揖斐川町の中でも違う地区の小学校に通う場合には、この「地域」という意味合いは薄くなっていくのではないかとと思われる。そのため、可能な限り少人数で、それぞれの地域の中で育っていくという考え方もあってよいのではないかと感じている。

住 民：保護者として、教育の内容に関しては特に言うことはない。ただ、保護者としては教育と子育ては一体化しているように思っており、我々にとってこの場は子育てをどうしていくかということだと感じているため、管轄は違うかもしれないが、教育と子育てを一体的に考えていただくとよい。その中の一つがクラブの地域移行で、全国的な話のため致し方ないことだが、うまく進んでいるか疑問に思うところが多々ある。例えば、学校を統合するのであれば「揖斐川町は地域移行せずに学校ですべて行う」ということにしていただくと、保護者としては子育てが非常にしやすくなる。もちろん先生方にも様々あることは重々承知しているが、教育と子育てを一体化しつつ特色を出していくのであればそのくらいのことをやっていただき、強くアピールしていただくと人口増加につながるのではないかと期待しているので、ぜひ検討していただけるとありがたい。

住 民：私はこの地域の住民だが、教員の立場でも話をさせていただく。町内の学校に勤務する中で、私が一番大切にしていたのは「地域とのつながり」で、それぞれの小学校がもつ地域とのつながりはその地域特有のものである。だが、もし今後統合する場合、その小学校に通う子どもたちにとって「地域」とはどこになるのか、誰にお願いすればよいのか、ということが大きな問題になり得る。場合によっては、小学校とのつながりの中で子どもたちと関わる機会を奪ってしまうことや、そうしたつながりがあることを負担だと思う方にたくさんの要求が届くということも考えられる。仮に今後統合をするにしても、つながりが特定の地域だけに偏ってしまうことがないように、学校運営協議会も活用しつつ、時には広域での話し合い等も行いながら、どうやって地域が学校をサポートしていくのかという動きをつくっていただけるとよい。また、教員としてはそれを活用させていただけるとありがたいので、検討していただきたい。

住 民：1点目に、子どもの数が大きく減るために審議をしているので当然のことではあるが、ただ少人数になったから統合を考えるということではなく、揖斐川町の子どもたちのためにどうするのが一番よいのかということが審議の大元にある必要がある。もしかすると統合せずに少人数の子どもを地域全体で見守って育てた方がよいかもしれないし、一定の集団の中で互いに影響し合いながら成長できるようにするために少し大きな学校の中で力を付けさせた方がよいかもしれない。ただ、このように審議の一番の大前提には「子どものためには何がよいのか」ということがあるべきなので、様々な立場があるかもしれないが、それぞれのメリットとデメリットを考えつつ審議していただきたい。2点目に、仮に1つに統合された場合、町のすべての子どもが同じ学校の子どもになるが、元々は住んでいる地区の子どもなので、それぞれの地区で支え

ていくことも必要なのではないかと考える。例えば、今小島地区では地域の方が学校に協力的で、様々なボランティアをしていただいたり、子どもたちもコミュニティセンターの行事にたくさん参加したりしてくれていて、学校と地域の間に良好な関係がある。こうした関係は学校が1つに統合した時にも大切で、地域の子どもは地域の者で育てていくという仕組みが今後必要になると感じるため、そのことも踏まえながら審議していただきたい。

住 民：はじめに、揖斐川町の人口構成は、大野町や池田町と比べて20年先を進んでいると思われる。これは子どもの数だけではなく、いわゆる生産年齢人口も減少しており、地域を維持するのに大変な影響が出ている。そうした中で今回審議していただいているが、学校や教育は地域、まちづくりと密接な関係があるものであり、未来への投資である。そこで、学校数や学級数に関する検討はもちろん、どういった教育を目指すのか、それにより今直面している少子化の課題に対してどう取り組んでいくのか、まさに「揖斐川町独自の教育立町」によって揖斐川町に夢と希望がもてるよう、審議会は町へ力強く答申していただきたい。学校については今のままであるのが一番よいと思うが、もしもそれが叶わないという方向になるのであればということで、ここからは具体的な私見を述べさせていただく。1点目に、資料の図表2をみると、仮に1つに統合したとしても小規模校になると思われる。そこで、小規模校は個々の児童生徒を細部まで見ていただけることや、それぞれに応じた環境をつくることができるというよさがあるため、それらをもっと生かすことができるとよい。また、それにあたっては県から配置される教員数が課題だと思うので、町単独でALTはもちろん、カウンセラーや看護師、作業療法士、金融、建設などの分野ごとの専門職も含めた様々な方に入っていただきながら、県が配置する教員数の倍程度の人数を確保し、学校の中に一つの社会をつくるイメージで進められてはどうか。さらに、聴講生として大人も一緒に授業を受ける、ということもよい刺激になる。こういった思い切ったことにぜひ取り組んでいただきたい。2点目に、バス通学になると時間がかかるため、早朝の学童保育の実施や朝食の提供に加え、さらに児童館を学校に併設するとともに休日にもスクールバスを運行し、子どもたちが一緒に勉強したり遊んだりできるようにしてはどうか。以前ある保護者の方から、「子どもたちが広い地域に点在しているため、子どもたちが遊ぶには親の送迎が必要となり、夏休みほど子どもたち同士で遊べない」ということをお聞きし、そのような弊害があるのかとショックを受けたことがある。今後もし1つに統合した場合、さらに子どもたちが広範囲から集まることになるため、ぜひ休みの期間も子どもたち同士で遊んだり勉強したりできる場があるとよい。3点目に、小さい頃から五感を刺激することが大事だと言われており、幼児教育から学校へつなげていくというところで、幼児教育にももっと力を入れてほしいと考える。自治体の中には、3歳児から中学3年生まですべて1学級で、12学級すべてにALTを配置しているところもある。そうした教育の特色を出しているところもあるため、ぜひとも町の教育の特色として、幼児教育から続く教育ということに力をいれたいと思っている。最後に、一番課題となるのは地域との関わりである。学校は地域の核であり、それを中心に動いていることが多くある。現在、小島地区では伝統文化などを通じて子どもたち同士、親同士がつながったり、そして地域の人たちとつながったりする機会を、地域づくり協議会や公民館などに年間を通じて多数つくっていただいている。これらを何とか維持できるように工夫していただきたいし、そのあた

りについて審議会で明らかにしていただきたい。この点に関しては、他の地域も同様だと思っている。学校教育の在り方は、まさに「未来をかけた究極の地域づくり」だと考える。そこで、審議会委員の皆様には必ず住民の不安解消や課題の解決ができるようにしていただき、揖斐川町の明るい未来をつくるために、教育委員会が「日本一の教育ビジョン」を示せるよう答申していただくとともに、その答申前には答申素案をぜひ説明していただきたい。揖斐川町にどんな明るい未来が待っているのか、期待している。

住 民：審議会のタイムスケジュールについて知りたい。

教育長：今年度立ち上げた審議会は、来年度の2月頃を目処に答申を出せるよう、来年度も継続して審議していただく予定である。今年度はこれまでに2回審議会を開催しており、シンポジウムを経て、その後第4回審議会を開催する予定である。さらに来年度も同程度の会議を開催させていただき、2月頃答申していただいた内容に基づいて町行政の方で議論を進める予定である。

住 民：先ほどから出ている「地域」という言葉が、小島のことを指すのかその中の17か所の地区を指すのかはわからないが、私は区長を務めており、その中で区として子どもと何かをやりたいと思っても、そのためのお金がない。町から各地区に対して、何らかの活動をする際に一定の助成をしてもらえる制度をつくっていただきたい。

#### （４）閉会挨拶

- ・ 森委員より、閉会の挨拶を行う。

以上、閉会